

## 真夜中の栗泥棒

畑の野菜や果物はあまり盗まれないが、栗は別だ。栗拾いと言つ位いで、落ちていゝのだから、拾つても罪にならないと思つてゐる節がある。

二十年前、生家のリンゴ畑サイドにある、土手や傾斜地を無償で借り受け、将来余生を孫たちと楽しみたいと思ひ、栗の苗木を二十本程植え、五年後あたりから毎年仙台より拾ひに行つた。

その後りんごも作り始めたから、楽しみも増え、仙台の友人、知人、お得意さんを招待して、栗拾ひ、リンゴのもぎ取り、芋煮会を楽しくやつた。道端の細長い土地には十本程植えてあるが、盗んで拾われる。五十米位の道路脇にバラ線を張つたが駄目だ。白昼堂々と拾つて行く。

女三、四人して拾つて居るのを見つけ、注意すると「拾つなどや」と言つてシブシブ歸つていく。果樹泥棒の意識が全く無い。

一番奥の木は小屋から見えない。バラ線を多く張り、潜れない様にしてあるが、遠回りして他所の畑から侵入してくる。拾つて居るのが見えないが、車が見えたので、行つて見たら、男二人して拾つて居た。脅かしをかけた。

「去年此処で貴方たちと同じように拾つて居た人に注意すると、毒ついできた。栗も返さず歸つたから一〇番に通報した。その人達が家に歸り着いたら、もうお巡りさんが入り口で待つていたそうだ」栗を置いて歸れと言つたら、平謝りに謝つて歸つていった。

これは作り話であるが、生家がリンゴ泥棒にあつた時の実話がある。

リンゴの収穫が始まつたある夕方、あるリンゴ園で、まだ作業をしていた旦那が、ふと見ると、薄暗くなつた隣の生家のリンゴ園に、乗用車が入

っていく。ソット近づくと手探りでリンゴを採っている。十キロ位採ったよつだ。車のナンバーを控え、百十番通報した。犯人は自宅前で捕まり、一晩署に泊まり、翌日リンゴを持って謝りに来たそつだ。まだ青いリンゴを持って。

他の栗園は人家から百米くらいしか離れていない所にあるので、人家から遠い私の栗園が狙われたよつだ。真夜中に、懐中電灯で照らしながら栗泥棒しているバアちゃんがいると、おしえられた事がある。その人は誰だかすぐ分かったが、なにも言わなかった。

栗泥棒を思う時、幼き小学校時代のエピソードを思い出した。

私の生家、主家と作業場の間に、丹波栗の大木があった、昔は山の栗も全然虫食いが無い。沢山落ちているはずが、イガは多いのに栗が少ない。毎晩拾いに来る泥棒がいるよつだ。一晩見張っても居られない。私は考えた。倒れやすい様に、又倒れたら大きな音がするように、木材や古竹を母屋に立てかけ、丈夫な細紐を二、三ヶ所に張り巡らし、引いたら倒れるように防犯装置を作った。

作ったその夜に、見事泥棒さんが引掛った。真夜中にバターン、ドスン、ガラガラ、大きな音がしたと思つたら、カタコト、カタコト、下駄の足音で逃げていく音が聞こえた。

家族全員目を覚まし、大笑い、「すえず（臣市）はこついうことするの好きだからな」と褒め言葉だか、あきれ言葉だか、分からない声を浴びせられた。

家族、皆で夜中の栗拾いをした事を思い出し、一人悦に入った。